

研究・調査報告書

報告書番号	担当
86	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
Alcohol Hangover Effects on Memory Functioning and Vigilance Performance after an Evening of Binge Drinking. 夜間のアルコール大量摂取後の二日酔いが記憶機能と覚醒パフォーマンスに与える影響	
執筆者	
Verster JC, Van Duin D, Volkerts ER, Schreuder AH, Verbaten MN.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Neuropsychopharmacology 2003;28(4):740-746	
キーワード	
アルコール、二日酔い、記憶機能、覚醒	
要 旨	
<p>急性のアルコールによる酔いが記憶機能に与える影響については、健康被験者とアルコール依存症の被験者で十分研究されている。しかしながら、アルコールを摂取した翌朝の症状が記憶にどのように影響するかについての研究はほとんど行われていない。本研究では、アルコール摂取後の二日酔いが記憶機能と覚醒パフォーマンスに与える影響についての検討を行った。全 48 人の健康被験者を対象に、夕方のベースライン実験、その後のエタノールまたはプラセボ摂取実験、朝の実験に参加してもらった。記憶の機能は word learning test (即時の記憶、遅延記憶、認知などのテスト) で評価した。覚醒の度合いを調べるために、45 分の Mackworth clock test (指標はヒットの数とアラームの間違い) を行った。更に、word learning test が鎮静効果と特異的な記憶障害を反映しているかを推測するために、被験者の警戒性を評価した。</p> <p>その結果、朝のセッションにおける遅延記憶はアルコールを摂取した群でプラセボ群に比べて有意に悪くなっていた。一方、即時の記憶や認知はアルコールグループでは変化は観察されなかった。また、アルコール摂取グループでは朝の警戒性が有意に減少していた。しかし、Mackworth clock test ではアルコール摂取とプラセボ群の間に差は観察されなかった。遅延記憶の特異的損傷は記憶保持課程がアルコール摂取による二日酔いに損なわれることを示している。覚醒パフォーマンスは有意には影響されなかった。</p> <p>以上の結果からこの記憶障害はアルコールによる鎮静効果を反映しているのではないことが示唆される。</p>	